

# Cognition and Linguistic Analysis

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/984">http://hdl.handle.net/2297/984</a>

## 認知的言語分析の核心

中 村 芳 久

### 1 前提となる世界観

認知的な言語分析は、さまざまな言語現象を、イメージ(認知像)やイメージ形成能力(認知能力)、さらにはイメージの形成される過程(認知プロセス)と関連づけて説明しようとする方法をとるが、ひとつの世界観・言語観を前提としている。その世界観・言語観とは、次に示されるように図式的にはきわめてシンプルで、容易に納得されるものである。

#### (1) 客観世界 ⇔ 認知的世界像 ⇔ 言語

まずなんらかの客観世界があって、われわれ人間はその世界とインタラクトしながら、人間にとての世界像を形成している。つまり、われわれが現実世界と思っている世界は、客観世界と人間とのインタラクションによって構築される世界像だというわけである。この世界像は、五感や推論能力などの認知機構を通して形成される世界像であるため、「認知的世界像」あるいは「認知世界」と呼ぶことのできるものである。そして、言語が直接対応しているのは、この認知世界であって、客観世界ではない。このような世界観・言語観が前提となっている。

このような世界観の源流を、イギリス経験論の祖とされるジョン・ロック(John Locke 1632-1704)の『人間悟性論』(*Essay Concerning Human Understanding*)第3巻に見ることができる。ロックは、「もの」(things)の記号として「観念」(ideas)があり、「観念」の記号として「ことば」(words)があるとする(第3巻第9章)。これら3者の関係は「もの ⇔ 観念 ⇔ ことば」という図式で表され、上の(1)の図式と平行的である。観念は、経験(=インタラクション)を通して「感覚」(sense)と「内省」(reflection)によって得られるとし、認知能力に相当する心的能力の生得性も否定していないから、ロックのいう観念世界は上の認知的世界像と見なすことができる。ロックはまた、観念をものの記号、ことばを観念の記号と見なした点で、記

号学の祖とも仰がれるのであるが、そのような記号性が、言語伝達の障害になることも力説している。すなわち、客観世界を伝達する導管として（すでに導管(*conduit*)というメタファーを用いている！），ことばが不完全である理由の一つに、ことばが客観世界に対して二重に記号的であること、つまりことばが客観世界と直接対応していない点を挙げている。

とはいっても、われわれは、現代物理学のことば（用語）は客観世界と直接対応していて、それを精確に記述していると思っていないだろうか。「原子」や「素粒子」という語彙にしても、それらが客観世界の中の客観的存在物を指していると思ってはいないだろうか。ところが実はそうではない。現代物理学者としてアインシュタインと双璧をなすハイゼンベルグ（Werner Karl Heisenberg 1901—76）の言葉を援用して言えば、「現代の精密自然科学の自然像…、それは実はもはや自然の像ではなく、自然とわれわれとの関係の像である。一方に時空間内の客観的経過、他方に客観的経過を写し取る精神、この対立的二項に分ける旧来の分割、…デカルト的区別はもはや…適切ではない。…自然科学はもはや観察者として自然に対向しているのではなく、人間と自然との相互作用の一部である…。」「ニール・ボアが述べたように、われわれは単なる観察者ではなく、[対象的自然との]共演者である、ということに気付かなければならない」。（『現代物理学の自然像』尾崎辰之助訳、みすず書房、p. 9, p.23）そうしてみると、確かに、原子や素粒子にしても、特殊な手段や理論を通してはじめて認識できるのであるから、これらも認知的世界像だといってよい。身体と五感と日常的な推論を通して世界とインタラクトする日常人の認知世界で、原子や素粒子をイメージすることはできないが、これは、物理学者の用いるミクロの認知手段にとってカップとコップの違いが問題にならないのと同じことである。認知主体が客観世界とどのようにインタラクトするかに応じて、構築される認知世界が異なるということであり、要は、物理学者が解明していると思っている世界も、日常人が現実として見ている世界も、それぞれのインタラクトの仕方で認知的に構築される世界像にすぎないということである。<sup>1)</sup>

以上のようにわれわれにとっての現実世界は、とりあえずは認知世界でしかないのであるから、言語が対応している世界が認知世界であることは、容易に確認できよう。

しかし、専門的には、複雑な言語体系が認知的世界像やそれを形成する認知能力や認知プロセスと細部においてどのように対応しているのかということが大きな関心として浮かび上がる。言語体系を認知世界から切り離し、自

律的な記号系として、閉じた記号系のなかで言語の仕組みや規則性を探ることも重要なことであるが、同時に、認知世界と言語の対応関係を前提として、両者の具体的な対応関係を究明してみるとことも不可欠であって、これら2つの作業が対立するのではなく、相補しあうことによって、人間言語の本質が解明されるものと思われる。

さらに将来的には、言語現象と対応する認知能力や認知プロセスを、コンピュータでシミュレートし、あるいは脳内のニューロン活動まで特定するような研究への広がりも大いに期待されるところである。また、認知的言語分析から、相手領域つまり認知プロバーの研究領域への貢献も十分予想される。つまり、認知領域内だけでの研究では、見えにくい現象、説明のつかない現象が、関連領域である言語の観察を通して見えてくる、説明がつくことがあるだろう。「メタファー的理解能力」の検証がよい例で、そこに言語観察からの貢献を見逃すことはできない (Lakoff and Johnson 1980)。

### 1.1 認形的言語分析の成立

ただし2つあるいは3つの領域にまたがる研究は、相手領域の一定の研究成果を俟たなければならないということがある。例えば、アメリカ言語学の少なくとも表舞台で、意味が考慮されなかったことがあるが、これは、意味の科学的究明が遅れていたためであった。つまり、自然言語の意味を本格的に究明する領域が発達していなかったために、意味を漠然と言語研究に持ち込むのは分析の厳密性を失う危険性があると判断されたのである。

ブルームフィールドは、『言語』(1933) その他で言明しているように、言語の形式面の研究と、形式と意味の対応関係の研究を、言語研究の二本柱とみなしていた (e.g. 1933:74)。しかし、意味の科学的究明の遅れのために、形式と意味との対応関係の研究が先送りにされ、形式面のみが集中的に研究されることになる。そして、この慣習がそのまま生成文法に継承されたと言ってよい (cf. Huck and Goldsmith 1995:ch.2)。ある段階で生成意味論

(Generative Semantics) が登場し、形式と意味のマッチングが提唱されるが、当時、意味といつてもまだ、元素的意味を大文字表記し、論理学に準拠して表示する程度であり、自然言語の意味についてその本質的解明が進んでいたというわけではなかった。その点からすると、生成文法が、解釈意味論の立場を探り、あるいはLFというレヴェルを導入し、意味に動機づけられた形式という立場を拒否したのは、さまざまな要因も絡んでいたとはいえ、一つの妥当な選択だったのかもしれない。少なくとも「意味の科学的解明が遅

れているから、意味と形式の関係は後回し」というブルームフィールドの意向通りではあった。事実、意味の科学的究明は進んでいなかったのである。

しかし今や、人間言語の意味を科学的に究明する道具立ては整いつつあると言ってよい。認知心理学や認知科学の進展に伴って、人間言語の意味がわれわれの認知作用の観点から捉え得ることが徐々に明らかになってきたのである。人間の認知機構の研究は、科学的分析たりうるのであるから、意味を認知作用に環元することは、意味が科学的に解明し得るということに他ならない。もはや、(ブルームフィールドの懼れに反して)認形的に捉えられる意味というものを言語分析に持ち込んでも、分析の厳密性をそこなう危険性はないだろうことが十分予測される。そうであれば、形式と意味の対応関係を正当に考察できる時期がやっと到来したことになる。ある意味で、生成意味論の主張がまったく装いを新たにしてよみがえってきたと言えなくもない。認知的言語分析を推進する学者に、レイコフ、フィルモア、ラネカーなど、かっての生成意味論の提唱者や生成意味論寄りの学者が目立つのも故なしとしない。

生成意味論との対比で言えば、認知的言語分析は、生成意味論が生成文法から引き継いでいた「派生」(derivation)という概念を採用しない。例えば、kill someone と cause someone to die という動詞句で、両者を同一の意味的基底構造から派生させるというような立場は採らず、<sup>2)</sup>それぞれの構造を「動機づける」認知プロセスを措定し、それを意味構造として、両者の類似点と相違点を明示する。これは認知的分析の新しい装いの一面だと言ってよい。

以上を要約すると次のようになる。まず (i) 認知的言語分析は、言語と認知世界との対応関係を前提として、さまざまな言語現象を、認知的世界像あるいはそれを形成する認知能力や認知プロセスと関連付けて、体系的に説明する言語分析の方法であるが、このような認知的方法は、言語や言語能力の総合的な解明にとっては不可欠な作業である。また (ii) 意味が認知的世界像やそれを形成する認知作用に還元されると、意味は科学的考察に十分耐える領域となり、意味と形式の対応関係の研究(つまりは今日的な認知的言語研究)が、言語研究史的に見ても、正当な科学的言語研究として成立する段階にあるということである。

## 2. 言語と認知：認知的言語分析の核心

さて、言語と認知(意味)との対応関係を少しずつほぐしていくことにし

よう。言語形式は、基本的には語彙的要素と文法的要素から成るのであるが、まず、それぞれの要素が認知的世界像、認知能力、認知プロセスなどどのように対応するのか明らかにしておく必要がある。

言語の認知的分析という場合、その基本となる考え方は、既に見たように、言語形式が認知的世界像と対応している、つまり（認知的世界像は意味であるから）すべての言語形式が常に意味を持つ、ということである。従って、構文や屈折語尾のような文法的要素も、語彙がそうであるように、意味を持つということになる。この点で、文法の自律性を主張する生成文法に代表される言語理論とは対照的である。

さらに、認知的言語分析の理論として「認知文法」(Cognitive Grammar)を提唱するラネカー (Langacker) は、語彙的要素と文法的要素とでは、表す意味が異質であり、文法的要素は、認知主体が対象を捉える際のさまざまな認知能力や認知プロセスに対応していることを示唆しており (1990:ch. 12)，最近それを明確に述べるようになっている。<sup>3)</sup> 例えれば、*cat* に関して、*this cat, some cat, any cat, a certain cat*などの表現が可能であるが、これらの表現は、*cat* という語彙的要素と、*this, some, any, a certain*などの文法的要素から成っている。その場合、文法的要素は、話し手や聞き手である認知主体が対象に対してどのような心的アクセスをしているか (how the speech-act participants have succeeded in establishing mental contact with that particular instance, p. 231)，その認知プロセスを表しているというわけである。もちろん、文法的要素の種類は多いから、さまざまな認知能力・認知プロセスを表わしているはずだが、一般的な形で言えば、次のようになるだろう。すなわち、語彙的要素と文法的要素から成る言語表現は、単に描写の対象に関する意味内容 (semantic contents) のみを提示するのではなく、実は、認知主体が対象との相互作用を通して、その対象をどのように捉えているか (construal) をも表現している (これは認知文法の基本主張である)。そしてその際、語彙的要素が、具体的な意味内容を、文法的要素が、認知主体の認知プロセスを表す、というわけである。(もちろん、語彙的要素と文法的要素は連続的であるから、完全に役割を分担しているというわけではなく、程度の問題ではあるが。)

この2点、すなわち (i) 文法的要素が意味を表す（認知と対応する）という点と、(ii) その意味が基本的には認知主体の認知プロセスであるという2点は、認知的言語分析の核心となる作業仮説だと言ってよい。ここでは、構文という文法的要素の表す基本的な認知プロセスとはどのようなものなの

か、その一例を、最も意味の特定しにくい文法形式の一つ、SVO 構文の意味の考察を通して、インフォーマルな形で提示しておこうと思う。この考察は、(i) (ii) の観点が完全に確立しているというわけではないものの、他の文法的要素にも言及することによって、少なくともその作業仮説としての妥当性を検証することになる。さらに、(i) (ii) によって、言語についての素朴ではあるが、根本的な疑問についても解答を簡単に用意できるということがある。最終的には、語彙的要素が何を表すのか、また文法的要素が何を表すのかということを ((i) (ii) より) さらに精確に提示してみたいと思う。

## 2.1 SVO 構文の表す認知プロセス

次のような例は SVO 構文の典型的な例である。

- (2) a. The boy kicked the dog.
- b. He has broken a window with a ball.
- c. Mary cut the cake.

この種の例文では、SVO という構文は「主語から目的語への物理的な働きかけ」を表していると言うことができる。さらに、次のような例にも SVO 構文が見られる。

- (3) a. Everybody saw Halley's comet.
- b. I can't remember his name.
- c. Nobody noticed changes in his behavior.

この場合、「主語から目的語への物理的な働きかけ」ではなく、「主語から目的語への心的接触」が叙述されていると言われる。「物理的」か「心的」かの違いはあるものの、主語と目的語のインタラクションは確かに認められるし、しかもそのインタラクションは主語から目的語への一方向的なものであるから、(2)(3)に関して、SVO 構文は、「主語から目的語への一方向的インタラクション」を表していると言えそうである。

しかし、次のような例の SVO 構文では、描写されているのは主語と目的語のインタラクションのようではあるが、明らかに一方向的ではない。

- (4) a. Line A intersects line B.  
 b. Mary resembles Nancy.

その証拠に、主語と目的語を入れ替えて表現することができる。

- (5) a. Line B intersects line A.  
 b. Nancy resembles Mary.

描写されている事態を見るかぎり、そのインタラクションは相互的、双方向的である。

この場合、しかし、描写されている状況は、確かに直線Aと直線Bの交差した状態ではあるが、表現として(4a)のように「直線Aが直線Bに交差している」と言わると、すでに存在する直線Bに直線Aが交差して行っているような感じがする。表現の段階で動態性が生じているわけである。(4b)の「メアリはナンシーに似ている」の場合も、描写されている状況としては、双方食的なインタラクションではあるが、表現レベルでは、目的語のナンシーを基準にして、それにメアリの名部を対比させることによって「メアリがナンシーに似ている」と表現されている感じである。つまり、SVO構文をとる動詞 *intersect*, *resemble* を用いて表現しようとする際、話し手は、対象が静的な状況であっても、その状況を動的に認識しているということである。対象が双方行的なインタラクションであっても、SVO構文をとる動詞を用いてこれを表現しようとすると、いずれか一方が基準で、それに対して、もう一方が働きかけるという認識を経て、あるいは、いずれか一方を基準にして、それに対してもう一方を比較・照合するというような認知プロセスを経て、表現にたどり着くというわけである。このような動的な認知プロセスが、(4)(5)の場合、SVO構文に反映していると言うことができる。そうすると、(4)(5)では、SVO構文は「主語から目的語への認知的なインタラクション」を表しているということができよう。

(2)(3)の場合、「主語から目的語への物理的・心的（一方向的な）インタラクション」であり、(4)(5)の場合、「主語から目的語への認知的インタラクション」だとすると、(2)(3)と(4)(5)のSVO構文には共通性はないのであろうか。

(2)のように、主語から目的語への物理的インタラクションである場合、当然、認知上も主語から目的語への働きかけになるはずであるし、(3)の心的インタラクションの場合も、主語の経験者からその経験の対象（目的語）へと

認知が進むのがふつうだから、(2)(3)の場合も、「主語から目的語への認知的インタラクション」が認められると言えよう。そうであれば、SVO 構文は、一般に「主語から目的語への認知的インタラクション」を表すと言うことができる。

ここで、SVO 構文の「表すもの」を峻別する必要がある。(2)では「主語から目的語への物理的働きかけ」で、(3)では「主語から目的語への心的接触」であり、(4)では「主語と目的語の静的な関係」であった。これらはすべて、SVO 構文と特定の動詞を用いて描写される対象としての事態である。これに對して、「主語から目的語への認知的インタラクション」というのは、描写される事態や対象ではなく、対象を捉える認知主体の心的プロセスであり、これが SVO のような文法的構造のあらわす意味である。

もちろん、主語も文法的要素であるが、SVO 構文の表す認知プロセスをもとにすると、主語は「一方向に進む認知的インタラクションの始点」を表すと言うことができる。その場合、始点は、常に認知的際立ちが高いので、「定型節の表す関係や事態の中の図 (figure)」(e.g. Langacker 1990:224) を表すということもできるわけである。後で詳しく触れるように、主語は「行為者」を表すという言い方も可能であるが、これは、主語の位置に現れる多くの役割のうちのプロトタイプである。プロトタイプは、言語表現の表す対象に関するものであって、認知プロセスに関するものではない。いずれにしても、言語表現の表す、対象と認知プロセスは峻別しておく必要がある。

## 2.2 前置詞の表す認知プロセス

各品詞に属する個々の要素の中で、名詞、動詞、形容詞、副詞に比べると前置詞は、比較的、文法的要素としての度合の高い要素であるが、そのためそれが認知プロセスを表す度合も高くなっている。例えば、*from ~ to ~* という前置詞句は、現実の空間経路を表すと考えがちであるが、例えば、ロス・サンフランシスコ間の高速道路を、*the free way from Los Angeles to San Francisco* と表現したり、*the free way from San Francisco to Los Angeles* と表現するような場合、実際に辿る経路について言っているのではなく、話し手（や聞き手）が頭の中で辿る経路を言っているのであるから、これらは「認知的な経路」を表しているのである。そのような前置詞句が、実際に辿る経路を表す場合にしても、通常は認知的経路も伴うので、そのような前置詞句は、認知的経路を表すとしておいた方が、より一般性の高い意味記述になる。

前置詞の中でも、*of* は、属格と対応しており、とりわけ文法的要素として

の度合が高い。それ故、なんらかの認知プロセスを表すとしておいた方がよいくらいである。次の2組の *of* 前置詞句のなかで、(7 b)はすわりがわるい。

- (6) a. the children of the parents
- b. the parents of the children
- (7) a. the leg of the table
- b. \*the table of the leg

しかし、次のように、倒壊した家を前にして言うことのできるような文(8 b)の中では、少し容認度が上がる。

- (8) a. I'm looking for the leg of this table.
- b. I'm loking for the table of this leg.

(8 b)は、あるテーブルの足を手にして、瓦礫を掘り返しながらそのテーブルを探しているような場面である。学習辞典には、*of* の意味として、「所属」「根源」「分離」などが挙げられる。そのような記述は、(7 b)のすわりの悪さの説明には、有益であるが、しかし(8 b)のような文中で容認度を増す理由の説明には役立たない。辞書の挙げる意味が、*of*-phrase の描写する状況(対象)を、頻度順に列挙しているにすぎないからである。

(8)(a)(b)の場合、手元にあるテーブルや足を「手が掛かり」にして、足やテーブルを探し出そうとしているわけであるが、*of*-phraseは、認知的には、あるモノを同定する際の「認知的手掛け」になっている。次の例では、*of*-phraseが、まさに「認知の手掛けから」そのものを表しているために、さらに容認度が上がる。

- (9) Can you imagine the table of this leg ?

「認知の手掛け」という認知的意味特性は、基本的に、A of B 構造のすべての *of*-phrase に見られるものであり、Langacker(1993)が *of*-phrase を「参照点構文」(reference-point construction)の一つと見なすのも同じような理由によるものと思われる。

学習辞典などで、*of* (-phrase) の意味として「所属」「起源」「分離」が挙げられるのは、それらが、なにかを探索・同定する際の「認知的手掛け」

になりやすいからである。つまりは、認知的手掛けになりやすいモノのプロトタイプを列挙しているということである。例えば「テーブル」とその「足」は全体と部分の関係にある（そして全体は部分の所属先でもある）が、全体を想起すれば同時にその部分も想起され、多くの場合「全体」の方が「部分」の認知的手掛けになる。そのため、「全体」を *of-phrase* で表して、*the leg of the table* とした方がすわりがよいだけのことである。(8 b)のように、テーブルの足を手掛けにテーブルを探しているような状況では、足の方が認知的手掛けになるので、「足」が *of-phrase* で表わされる可能性が生じるのである。*of-phrase* について、一方で「所属」や「根源」などを表すと/or/することができ、また一方で「認知的手掛け」を表すと/or/うこともできるわけであるが、これは、SVO 構文について、「主語から目的語への物理的働きかけ」や「主語から目的語への心的接触」を表すと/or/う場合と、「主語から目的語への認知的インタラクション」を表すと/or/う場合の二つがあったのと、並行的である。いずれの場合も、前者は、どのような対象を描写しているかの問題であり、後者は、どのような認知プロセスを表しているのかの問題である。

### 2.3 対象と認知主体の相互作用 vs. プロトタイプ

言語表現は、対象とそれを捉える認知主体との相互作用を表現するのであるが、相互作用とは、認知主体が対象を捉える際、その捉え方に、対象の方も影響力をもち得る、ということである。つまり、認知主体が対象を捉える際の認知プロセスは、単に、認知主体が客体たる対象を好きなように捉え、認知する過程ではなく、対象からも強く拘束される、ということである。例えば、「行為者が被行為者を叩く」というような行為、すなわち「物理的働きかけ」である場合、行為者から被行為者へと進行する認知プロセスを強く要求し、構文もその認知プロセスに適合した構文、すなわち、行為者を主語とし、被行為者を目的語とする SVO 構文になるというわけである。要するに、描写の対象が、認知プロセスを決定し、ひいては構文をも決定しているわけである。これとは対照的に、二つのモノが「似ている」「交差している」というような相互的、双方行的なインタラクションの場合、状況自体には認知プロセスを決定する力はなく、認知プロセスがどちらからどちらへ進むかは、認知主体にゆだねられている。それ故、*x resemble y./y resemble x.* のように、主語/目的語の交替が可能なのである。

対象と認知主体の相互作用のあり方として、対象が認知プロセスを決定するような場合と、認知プロセスが認知主体にゆだねられる場合とがあるが、

言語表現の表すプロトタイプ的事態は、認知プロセスに強い影響力をもっているような事態である。例えば、SVO 構文の表すプロトタイプ的事態は、「叩く」「折る」「切る」などの物理的働きかけであるが、これらは、認知プロセスを決定する影響力をもっている。一般的に言えば、言語表現の表すプロトタイプ的事態とは、文法的要素の表す認知的プロセスとともに自然に一致する事例である。すでに見たように、前置詞 *of* の代表的な辞書的意味として、よく「所属」などが挙げられるが、それは、そのような意味が、*of*-phrase の表す「認知の手掛けり」になりやすいからである。その点でも、学習辞典等で挙げられる意味は、プロトタイプ事例の列挙だと言える。

主語の表すプロトタイプ的役割は、「行為者」であるが、これが主語の認知的規定「定型節の表す関係や事態のなかの図」ともともよく一致することは、既に見たとおりである。言語表現の意味を分析する際に、描写する対象（のプロトタイプ事例）を扱っているのか、認知プロセスそのものを扱っているのか、両者の違いは常に意識しておくべきである。

## 2.4 言語についての素朴な疑問に対する解答

言語表現が描写の対象と認知主体の相互作用を表し、語彙的要素が対象を、文法的要素が認知プロセスを受け持つと見なす認知的言語分析の観点に立つと、これまで考察の糸口すら見いだせなかった、関連する 2 つの素朴な疑問にたいして、簡単に解答を用意することができる。

その 2 つの疑問とは次のようなものである。

- (10) a. なぜ言語形式に、語彙的要素と文法的要素があるのか
- b. なぜ文法化というような現象があるのか

(10 a) の「なぜ言語形式に、語彙的要素と文法的要素があるのか」という問い合わせに対して、すこし回りくどい解答をすると、次のようになる。まず、表現一般について回ることであるが、なにかを表現すると、そこには同時に表現者の対象の捉え方（例えば、表現者の視点）が現れている。どのような表現であっても、この点を免れるわけにはいかない。言語表現の場合も、対象があるがままに表現しているのではなく、そこには、対象を捉える話し手（認知主体）の姿勢（認知プロセス）が現れている。要するに、言語表現は、対象と認知プロセスを表しているわけであり、表現手段の方にも二種類が必要、つまり、語彙的要素と文法的要素が必要になるというわけである。そのどちらが欠けても、対象と認知主体の相互作用を表さざるを得ない言語表現

が成立しなくなるのである。文法的要素が言語によって基本的に一定であるのは、言語表現をする際の、対象の捉え方が慣習的に決まっているということだろう。これが個人の全くの自由になるのであれば、言語の重要な機能の一つである伝達に支障をきたすことになるだろう。

文法的要素としての SVO 構文や前置詞が、どのような認知プロセスを表すかはすでに見たところであるが、他にも、時制や文法的相のような文法的要素があるし、冠詞や接続詞も文法的要素である。これらの要素は、話し手である認知主体が、対象を、どのように捉え、自らとの関係でどのように位置づけているかを表していると言えよう。また接続詞は、2つの事象間の客観的関係を表しているようであるが、実は、接続詞は一般に、認知される2つの事態間に、認知的際立ちの差をつけようとする認知プロセスを反映するのであり、個々の接続詞は、2つの事象の間に、認知主体が読み込むさまざまな関係を表していると言うことができる。こうしてみると、*He was reading the book when I went to see him.*などは比較的単純な表現であるが、この表現のいたるところに、対象と認知主体の間のきわめて複雑な相互作用が表されていることが意識される。言語表現が、語彙的要素と文法的要素から成るのは、また、ピジンの次世代言語クレオールに、ピジンにはなかった文法的要素が発達すると言われるのも、言語の表現するのが、対象と認知主体の相互作用だからだ、ということになる。

(10 b) の「文法化」とは、語彙的要素が文法的要素へ変化するプロセスのことであり、最近よく問題にされる現象である。この現象について、どのような語彙的要素がどのような文法的要素になるかとか、意味的には具体的な意味がより一般的で抽象的な意味になるなど、その具体的な個々のプロセスをも含めて、指摘・分析する研究は数多くあっても、そもそも「文法化」という現象がなぜ存在するか、という問い合わせについて考察されることはあまりなかったと言ってよい。つまり、直観的に文法化と見なされる現象の一つ一つについての研究は進んではいるが、文法化とは一体何かという根本的な問題については明らかにされていない状況だと言ってよい。これは、言語観や言語理論の問題かもしれないが、少なくとも認知的言語分析の観点からすると、一応の解答を用意することができる。つまり、言語表現は、対象と認知主体の相互作用を表すのであるが、その場合、語彙的要素は対象の方を主に担当し、文法的要素は認知主体の認知のあり方を担当するのであるから、文法化とは、認知主体側の認知のあり方を担当する言語形式を作り出す（一つの）過程だろう、ということである。そして、文法化をこのように捉えると、従

來の文法化の研究について、新たな観点から見直すことができるようと思われる。

## 2.5 語彙的要素の表す認知プロセス

2節からの議論で、言語表現が対象と認知主体の相互作用を表すということを繰り返し述べてきた。そしてその際、対象と認知主体を対極に置き、対象が認知主体からまったく独立した客観的存在であるかのように扱ってきた。しかし、前章で見たようにわれわれに実感されるのは認知世界であるから、対象も、客体と認知主体の相互作用の産物なのである。

語彙的要素の典型である名詞について議論を集中しよう。各名詞の表すカテゴリーは、人間（認知主体）から独立して、客観的に存在するのであろうか。もしそうであるなら、あるカテゴリーを指す名詞がいくつかの言語に見られる場合、それぞれの名詞の指すカテゴリーは、たがいにぴったり重なり合うはずである。が、実際はそうではない。また、同一言語内にあっても、同一カテゴリーを指すはずの名詞は、個人によって使い方にズレがあるのがふつうである。このようなことは、語彙的要素の表す対象（カテゴリー）が、認知主体から独立した客観的存在ではないこと、さらには、人間（認知主体）と外界との交わりのなかで、生活に必要なカテゴリーが適当に作り上げられ、その中のあるものが共同化されたものであることを示唆している。つまり、カテゴリーは基本的には、なんらかの外界と認知主体との相互作用の産物だということである。

しかも、既に見たように、われわれが究極の客観的存在と思いがちな自然界の物質、原子や素粒子ですらが、実は相対的存在であることはすでに現代物理学の通説になっている。つまり、「素粒子」という名詞の表すカテゴリーまでが、実は観察者との関係で存在するということである。要するに、厳密な自然科学が到達したカテゴリー観も、言語の考察を通して得られるカテゴリー観も、同じように、なんらかの外界と観察者（認知主体）との相互作用の産物だということであり、非常に興味深いことである。われわれの身体性、知覚能力、推論能力、生存本能、経験、など認知主体に関するあらゆるもののが基盤となって、適当なカテゴリーが形成されるのであろう。カテゴリーが客観的存在でない以上、カテゴリー形成も一つの認知プロセスと見なすことができる。

ジョン・ロックは、初期のデカルトとは対照的に、観念は経験から獲得されると考えるから、観念は客観世界の記号ではあっても、忠実な反映ではな

い。とりわけ、複合観念 (complex ideas) はわれわれが単純観念 (simple ideas) を結合して構築するものとされており、複合観念のカテゴリーは私的 (private) で恣意的な存在と見なされている。

## 2.6 2つの認知プロセス

語彙的要素の表すカテゴリーが、認知主体の形成によるものであれば、その形成過程も認知的であり、一つの認知プロセスだと言うことができる。この認知プロセスも、文法的要素の表す認知プロセスも、認知主体に係るプロセスだという点では同じであるが、その認知プロセスが、単なる観察者としての認知主体の認知プロセスなのか、それとも表現者としての認知プロセスなのか、という点では、これら二つの認知プロセスは質的に異なると言えよう。つまり、文法的要素の表す認知プロセスは、単なる観察者としての認知プロセスだけでなく、表現者としての認知プロセスが加わっていると考えられるのである。さらに言えば、観察者の視点から何をどうカテゴリー化するかという認知プロセスだけでなく、発話の場（話し手・聞き手、発話時を含む）という視点からの認知プロセスが複合していると言えよう。言語表現をしないカエルや牛も、カテゴリー形成はそれなりに行っているわけであるから、カテゴリー形成にまつわる認知プロセスは、いわば「(言語) 表現以前の認知プロセス」と言うことができる。そして、カテゴリー形成によって生じたカテゴリーを前提として、語彙的要素と文法的要素から成る言語表現が生じると言える。

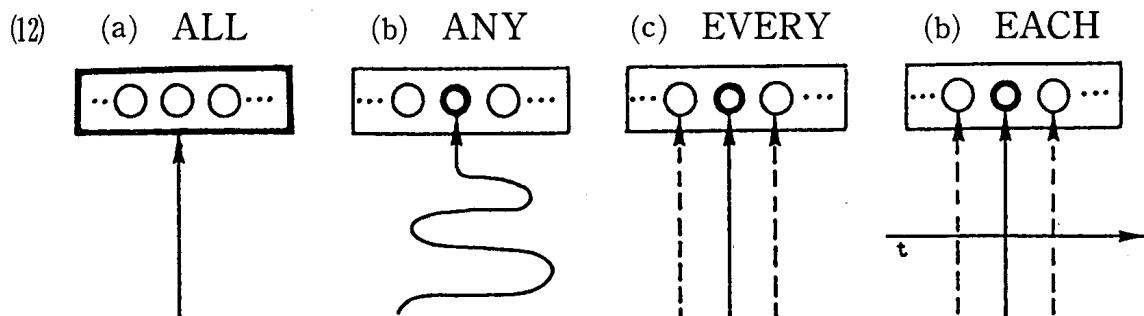
例えば、SVO 構文に関して、叙述される事態には相当数の参与体が関わっているはずであるが、それらのなかから主語と直接目的語で表す参与体を選択するというのは、表現者としての認知プロセスに特徴的なものだろう。また、前置詞句に関して、単に *the leg* ではなく、*the leg of the table* と言うのが、聞き手の理解を容易にするためであれば、その前置詞句の付加は表現者に特徴的な認知プロセスを表していると言えよう。さらに、代用表現となると、これはまさに言語表現特有の要素であるから、それが表す認知プロセスは表現者のものということになる。

もちろん語彙的要素と文法的要素は二項対立的ではなく、連続的である。*all, any, every, each,* などは、語彙的要素と文法的要素の中間に位置するが、その認知プロセスは、対象を認識する際の心的アクセスのあり方を表す。

例えば、次の例において、

- (11) a. All cats are playful.  
 b. Any cat is playful.  
 c. Every cat is playful.  
 d. Each cat is playful.

これらは叙述される意味内容はほぼ同じであるが、猫を認識する認知プロセスが違っている。ここでは、*cat* や *playful* の表すカテゴリー（これらは認知主体が適当に形成した像であるが）は前提とされ、特に猫への心的アクセスが微妙に違っている。*all cats* の場合、猫のカテゴリー全体についてある特性が云々されているが、*any cat* では任意の一匹の猫が問題にされ、他の猫についても同じ特性があることが含意されている。*every cat* と *each cat* では、猫の一匹、一匹が問題にされ、*each* の場合一匹ずつ順番に調べられた感じである。猫の一匹一匹を問題にする *every cat* や *each cat* は総称的な読みが生じにくいということになる。心的アクセスの違いは次のように図示される (Langacker 1988:8)。



そして、*all*, *any*, *every*, *each* のそれぞれに特徴的な認知プロセスのために、次のような容認度の差も生じるというわけである。

- (13) a. He examined each one in turn.  
 b. He examined every one in turn.  
 c. ? He examined all in turn.  
 d. \* He examined any one in turn.
- (14) a. All cats have something in common.  
 b. ? Every cat has something in common.  
 c. \*? Each cat has something in common.

- d. \*Any cat has something in common.

(13)で、*in turn* 「順番に」は「一つずつ」を前提にするので、個から全体へという認知プロセスをとる *each* や *every* は問題ないが、直接全体にアクセスしようとする *all* は *in turn* とは相容れない。また、*any* がアクセスするのは基本的には「任意の一つ」であるから、「複数個」を前提とする *in turn* とは大いに矛盾するというわけである。逆に、*in common* は「全部に同時に」を前提するので、これと最も合致するのは、*all* の表す認知プロセスである。

語彙的要素 *cat* の表す認知像の存在を前提として、それに対する認知的プロセスを、*all*, *any*, *every*, *each* などの文法的要素は表しているのであるが、SVO 構文も同じである。主語や目的語に現れる名詞の認知像や動詞の認知像を前提として、この構文の表す認知プロセスによって捉えられる事態が、個々の SVO 構文として表現されるというわけである。基本的には、他の構文についても同じことが言える。また、*Where is the leg?* の *the leg* の指示物が同定しにくいと思われる場合に、*Where is the leg of the table?* という具合に、*of-phrase* による「認知の手掛けり」が付加されるのである。

### 3 結び

本論の冒頭で言語が認知的世界像と直接対応することを指摘し、語彙的要素が具体的な認知像を表し、文法的要素が認知プロセスを表す、という基本的な作業仮説の下で、考察・検討を始めたのであった。2.5 節で、語彙的要素の表す具体的な認知像形成に伴って認知プロセスが存在することが明らかにされたが、そうすると、語彙的要素は、具体的な認知像と認知プロセスを表し、文法的要素は、認知プロセスのみを表すということになる。2.6 節で、語彙的要素の表す認知プロセスは、認知主体が外界とインタラクションを通して認知的世界像を形成する際の（特に）カテゴリー化に類する認知プロセスなのであり、文法的要素の表す認知プロセスは、いわば表現者としての認知主体の認知プロセスであろうことが議論された。ここに至って、言語的表出力のない動物と言語表現を特性とする人間の認知プロセスの差違（少なくとも両者の差異を意識すべきであること）が示唆されたことになる。

この点を考慮すると、2.4 節の「言語についての素朴な疑問に対する解答」は、多少修正されて次のようになる。すなわち、「なぜ語彙的要素と文法的要素があるのか」という問い合わせに対しては、語彙的要素が具体的な認知像とその形成に伴う認知プロセスを表すのに対して、発話の場を基点とする表現者と

しての認知プロセスを表すために文法的要素が必要だからであろうということになる。もう一つの「なぜ文法化という現象があるのか」という問いに対しては、表現者としての認知プロセスを表す言語手段が必要であり、文法化はその供給源の有力な一つだからであろう、ということになる。

文法化について、ラネカーは最近、語彙的要素がその具体的認知像を表さず認知プロセスのみを表すようになる過程と見なしている (Langacker, 1996.)。しかし、語彙的要素と文法的要素がいずれも認知プロセスを表すとしても、それぞれの認知プロセスは必ずしも同質ではないのだから、単純に、語彙的要素が認知像を表さないようになり、認知プロセスのみを表すようになれば、結果的にそれが文法的要素になるとは言えない。この点の詳細については稿を改めたい。

### 註

<sup>1)</sup>「客観的世界觀」と思っていたものが、実は人間に知覚され認識される限りの主観的世界にすぎないとという観点への転回は、19世紀から20世紀への変わり目の時期にも、思想、芸術、学問の各方面における胎動として認められる。

まず、絵画では、印象派から後期印象派、さらにはこれが引き金となって現れる表現主義、超現実主義、抽象派などのもろもろの動きを、西欧美術史上の革命を見るならば、この一連の動向を一貫して特徴づけるものは、世界を捉えようとする主体の主観性の強調だと言える。つまり、すでに与えられてある現実の秩序の客観的「非人称的」再現ではなく、世界とインタラクトする主体による現実把握の仕直しということである。ところで、ゲーテ (1749-1832) が『色彩論』(1810)においてニュートン力学とその光の理論を批判し、観測されるものと観測する者が一体となったときに自然はほんとうの姿を現すとしたことも忘れるわけにはいかない（もちろんこの考えが当時の科学者に受け入れられるはずはなかった）。

絵は見えている現実を描くのではなく、現実を見るようにするのだ、と言ったのはたしか詩人・批評家のハーバード・リードであるが、芸術=小説が世界を見るようにするのだという立場を明確に表明したのは、“It is art that makes life...” という句で知られる後期ヘンリー・ジェイムズである (H.G.ウェルズへの最後の手紙 1915年)。「芸術が人生を作る」とは、より直接的には、無定型で混沌とした、頼りない「人生」に確固たる形を与えるもの、充実感を付与するもの、それが「芸術」ということであるが、その向こ

うにあるのは、世界を定立させる原理は客観的現実の中にあるのではなく、人間の内面的世界にある、つまり、記憶、反省、意識、解釈、印象といった内面的現実が、むしろ世界そのものの存在を保証するという考え方である。

哲学では、「生の哲学」と総称される、ニーチェ、ベルグソン、ディルタイらの哲学が、直接的な生の体験、すなわち人間が生きることにおいて接触する主観的現実の優位を唱えるものであり、やはりこの時期に生まれている。これと基本構造を同じくするフッサーの「現象学」は、いわば主観性に学的根拠を与えようとするものであり、そこでは「志向性」という概念が導入され、見るということ自体が対象を取り取り、見る主体の生の方向に合わせて意味を持つような世界を組織するのではないかという考え方が示されている。そして、世界の仕組みは、結局のところ人間の身体の仕組みと間隙なく不可分である、という意味での「身体」という概念を強調したのが後の『知覚の現象学』(1945)におけるメルロ=ポンティである。

これらと同じ基本構造を持った「客観的世界觀」批判が、科学自体の内部にも起こっていたことは注目に値する。アインシュタインの相対性理論(1905, 1916)といわれるものがそれであって、その哲学的意味は、観察者の存在に気づいたことだと言われる。つまり、観察者がこの世界に属さない神かなにかのように、外から世界を眺めようとするのは間違いであって、観察者もこの世界の一部なのだという認識に科学的根拠が与えられたのである。後の量子論(1925)の背後にも、世界について知ろうとするとき、われわれの主観的なほうの条件が支配的になってきて、そういうものを離れて客観的なものそのものをありのままの姿で知ろうとしても、それは不可能なことだという考え方がある。

<sup>2)</sup> 2つの表現を、同一の基底構造から派生させるという考え方には、その2つの表現の意味が等しいということを前提としている。真理条件だけが表現の意味ではなく、表現の意味としてさまざまな要素があることが確認されていくと、もはや2つの表現の意味が等しいということなどないということになる(Fillmore 1975, Fauconnier 1985, Jackendoff 1983, Lakoff 1977, 1987, Langacker 1987, Pinker 1989, Talmy 1978, 1985)。そうすると、同一の基底構造から2つのいわゆる同意味の表現を派生させるという観点の前提が崩れ、派生という概念は放棄せざる得なくなる。要するに、表現と意味は、派生によって関連付けられているのではないということである。

<sup>3)</sup>名詞について、Langacker(1987:214-17)では、名詞という文法的要素は意味として、抽象的なモノ(thing)を表すとしているが、Langacker(1995:17)では、名詞が認知能力としてのモノ認識能力(reification)と対応していること、さらには普遍性の高い基本的な文法的要素が、認知能力や認知プロセスを反映していることを明確に述べている。

### 参考文献

- Bloomfield, Leonard. 1933. Language. Chicago : University of Chicago Press.
- Fauconnier, Gilles. 1985. Mental spaces. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Fillmore, Charles J. 1975. An alternative to checklist theories of meaning. BLS 1.123 -131.
- Jackendoff, Ray. 1983. Semantics and cognition. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Huck, Geoffrey J., and John A. Goldsmith. 1995. Ideology and linguistic theory. London and New York : Routledge.
- Lakoff, George. 1977. Linguistic gestalts. CLS 13.236-87.
- Lakoff, George. 1987. Women, fire, and dangerous things : What categories reveal about the mind. Chicago : University of Chicago Press.
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. Metaphors we live by. Chicago : University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1987. Foundations of cognitive grammar. Stanford : Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1988. An overview of cognitive grammar. Topics in cognitive linguistics. ed. by Brygida Rudzka-Ostyn, 3-48. Amsterdam and Philadelphia : John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. 1990. Concept, image, and symbol. Berlin : Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference-point constructions. Cognitive Linguistics 4.1 -38.
- Langacker, Ronald W. 1995. Raising and transparency. Language 71(1). 1-62.
- Langacker, Ronald W. 1996. On subjectification and grammaticalization. UCSD. ms.
- Pinker, Steven. 1989. Learnability and cognition : The acquisition of argument structure. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Talmy, Leonard. 1985. Lexicalization patterns : Semantic structure in lexical forms. Language typology and syntactic description, vol. 3 : Grammatical categories and the lexicon. ed. by T. Shopen, 57-149. Cambridge : Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard. 1988. The relation of grammar to cognition. Topics in cognitive linguistics. ed. by Brygida Rudzka-Ostyn, 165-205. Amsterdam and Philadelphia : John Benjamins.